

研究資料

雑木の庭が出現するまでの文化的背景と ロシア文豪の屋敷内樹林地の現状

岡島直方^{1*}, アナスタシア・ペトローヴァ²

¹緑地環境情報学研究室; ²東洋文化研究所

2010年10月20日受付; 2011年1月5日受理

Cultural Background behind the Popularity of Coppice Gardens in Japan and the Present Condition of the Estates of Two Russian Litterateurs

Naokata Okajima^{1*} and Anastasia Petrova²

¹Laboratory of Green Space and Environmental Information, Minami Kyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 884-0035, Japan; ²Institute for Oriental Studies of Russian Academy of Science, 107031 Moscow, Rojdestvenka 12, Russia

Received October 20, 2010; Accepted January 5, 2011

It was not until 1900 that the Japanese public began to appreciate the beauty of coppice woods. Kunikida and Tokutomi, two Japanese men of letters, were responsible for generating an aesthetic interest in coppices. Coppice gardens then began to be maintained in Japan. These Japanese litterateurs were influenced by the great works of Russian literature-Tokutomi had immersed himself in Tolstoy's novels and Kunikida, in Turgenev's. These works contained descriptions of the beauty of Russian deciduous woods. This paper surveys the present condition of the estates of Tolstoy and Turgenev. The houses of both authors were surrounded by large woods. Until now, it has been difficult for Japanese researchers to access information on the estates. This paper offers some pictures of the estates that were taken in 2010. The estates of both authors have tree-lined streets and both authors planted trees on their estates.

Key words: Japanese modern coppice garden, Doppo Kunikida, Roka Tokutomi, the estate of Tolstoy, the estate of Turgenev.

1. はじめに

19世紀の終わりから20世紀の初頭にかけて、ロシアの文豪の影響を受けながら自己を確立していった日本人の文豪達がいた。国木田独歩(1871-1908)はツルゲーネフ(1818-1883)の、徳富蘆花(1868-1927)はトルストイ(1828-1910)の著作を耽読していた。国木田独歩(以降、国木田)は1898年に雑誌「国民の友」の中で「今の武蔵野」という原稿を著し、1901年にはそれを含む単行本「武蔵野」を出版している。柄谷によると、国木田は近代日本において「風景」を発見した作家として解釈できるのだという。その風景とは「武蔵野」と呼ばれる東京郊外の、それまではありきたり

であった場所のことである¹⁾。国木田は、ツルゲーネフの小説の中にあったロシアの白樺林の描写を、自分の住む東京郊外のナラの林に重ね合わせて読むことにより、身近にあった林を新しい視点で捉えることに成功した。ただし国木田が発見した武蔵野での鑑賞対象は林のありようだけにとどまったものではない。一方、国木田と交流のあった徳富蘆花(以降、徳富)は国木田に勧められて書き始めた自然のスケッチ(文章による)をもとに1900年に「自然と人生」という書を著す。この書で、国木田が「武蔵野」の中で記述した特徴的な林(檜の木を含む林)に対して徳富は「雑木林」という言い回しを与えた。「自然と人生」の販売部数は1928年までで50万冊であり²⁾、多くの日本人が影響を受けたと考えられる。この二冊の書物により「武蔵野」と「雑木林」が結びつけて捉えられるようになったのである。徳富は1891年にトルストイの「戦争と平和」を読み、1893年には「アンナ・カレーニナ」

*連絡著者

を入手し、さらに1895年までに彼の著作を10作ほど英訳で読んでいた³⁾。このように既に徳富はトルストイに傾倒していたが、やや時間を経た1906年になって、徳富はキリストの聖地パレスチナなどを巡ったあと、トルストイを訪ねて当地で5日間滞在した。帰国した後は東京郊外の農家に移り住むようになり、自宅の周りで「半農生活」を試行し木を植えて、トルストイからの思想的もしくは環境的影響を具体的な形として表現し始める⁴⁾。このような形での日本の文豪達の活動は、後に「雑木の庭」と呼ばれる庭の出現に先立ち、受け皿となる美学を当時の日本社会に普及させたと筆者は考えている⁵⁾。

本論では、国木田、徳富が薫陶を受けたトルストイとツルゲーネフが実際に住んでいたロシアの屋敷を訪れ、その現状について報告する。住んでいた環境は彼らの描いた小説に少なからず影響を及ぼしたであろうと推測されたためである。その影響はひいては国木田や徳富に伝達されていったに違いないと考えられる。この報告に価値があるとすれば、それは一般的日本人が現地へ赴くにはいまだに困難がある⁶⁾ こと、日付入りの記録を残すこと、徳富が当時見たものを敷地の地図を併置しながら考えることなどから出てくる意義であろう。

2. トルストイの屋敷

2-1. 現状

トルストイの屋敷⁷⁾ があるのはモスクワ市内から南に車で約3時間のTula州のヤスナヤ・ポリヤーナ (Ясная Поляна) と呼ばれる場所である。トルストイは、「ヤスナヤ・ポリヤーナなくして私はロシアについて想像することはできない」と述べている。9月25日、筆者らは地下鉄でできるだけ南の駅まで行きそこから車で現地へアクセスする方法をとった。モスクワ郊外に向けて車で進んでいくと次第に道の両側に林の景色が現れはじめる。それは中央ロシアに見られる典型的な林の景色である。写真1は、道路の路肩に車を停めて、道路そばの林中からマッシュルームを採ってきた人々

が交流している様子である。これは晩秋の天気の良い日にモスクワ郊外でしばしば見られる光景である⁸⁾。彼らはこれを家で調理して食する。

ヤスナヤ・ポリヤーナのトルストイの屋敷は約412ヘクタールあり、訪問者は毎年13万人ほどである⁹⁾。図1はトルストイの屋敷の平面図⁹⁾ である。図1の主要な場所の説明を表1に示した。入口の門を抜けて「プレシュペクト」(Preshpect, 「戦争と平和」の中に出てくる名称) と呼ばれる小道をあがったa地点から見た景色を写真2に示した。それは白樺の並木道である。a地点の交差路を西に進み、b地点からトルストイの邸宅(地図⑨) を望んだのが写真3である。写真3の手前の草原に複数の棒が立っている。ここはかつてトルストイが植樹した領域であるが枯れてしまったので現在復元が行われ始めている¹⁰⁾。

写真4は、トルストイの邸宅(地図⑨) の東側にあるシナノキの喬木などからなる林である。それはc地点から見た景色で、上から見ると星型をした庭である。写真5はクズミンスキー(義姉)の家(地図⑦, ここでトルストイは学校を開いた。)の北側の道を西に進み、行き止まりになった道をヴロンカ川に向かって北に曲がった道で、d地点で撮影した写真である。その道をまっすぐ進むと十字路に出るが、それを北東にまがるとトルストイのお気に入りのベンチ¹¹⁾ (地図⑩) がある方向へ向かう。写真6はそのベンチに向かう道が90度折れ曲がって北西向きになる地点eでの写真である。トルストイが気に入っていたベンチ(地図⑩) は、北東側は開けた草原で、西側はモミの木などの林になっている境目の通路に西向きに置かれている(写真7)。ベンチの置いてある道を進んでいくと写真5、つまりd地点の延長上の道に合流する。ここで右側(北側)に曲がったg地点から写したのが写真8である。地図⑬で表された周辺はイギリス式庭園であり、地図⑪に表された部分はフランス式庭園である。これらの庭園を含む屋敷内の地割のほとんどを決定したのはトルストイの母方の祖父のヴォルコンスキー(Volconsky)公爵であった。ヴォルコンスキーはエカチュリーナ2世時代の宮廷に仕えていたが、治世の変化を機に引退



写真1. アクセス途中の林縁にて
(2010年9月25日撮影)



写真2. 「プレシュペクト」の白樺並木、地点a
(2010年9月25日撮影)



写真3. 修復地から居宅を望む, 地点b
(2010年9月25日撮影)



写真4. くさび型の林, 地点c
(2010年9月25日撮影)



写真5. ヴロンカ川への道1, 地点d
(2010年9月25日撮影)



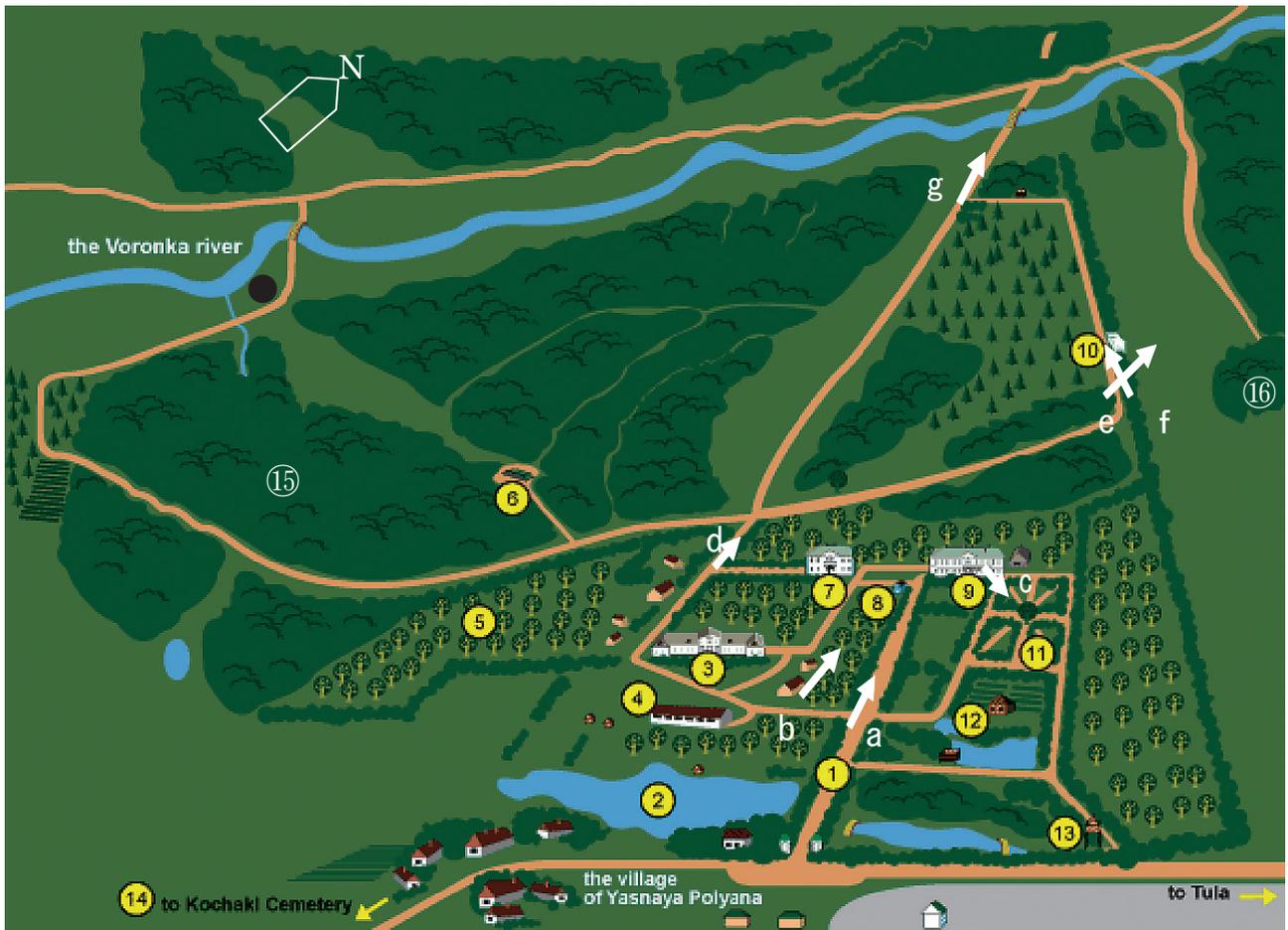
写真6. トルストイのベンチに向かう, 地点e
(2010年9月25日撮影)



写真7. トルストイお気に入りのベンチ, 地点f
(2010年9月25日撮影)



写真8. ヴロンカ川への道2, 地点g
(2010年9月25日撮影)

図1. トルストイの地所 ヤスナヤ・ポリヤーナ⁹⁾表1. 図1の地図の内容⁹⁾

番号	英訳	和訳
①	The "Preshpekt"	小径
②	The Big Pond	大きな池
③	The Volkonsky House	ヴォルコンスキーの家
④	The Farm Yard	農業用の家
⑤	The Orchards	果樹園 (林檎園)
⑥	Leo Tolstoy's Grave	トルストイの墓
⑦	The Kuzminsky House	クズミンスキーの家
⑧	The Pavilion	パヴィリオン
⑨	The Tolstoy House	トルストイの家
⑩	Leo Tolstoy's Favorite Bench	トルストイお気に入りのベンチ
⑪	The Park "Kliny"	くさび型の私園
⑫	The Green House	グリーンハウス
⑬	The English Park	イギリス式の園
⑭	The Kochaki Cemetery	コチャキーの墓

しヤスナヤ・ポリヤーナにやってきた¹²⁾。トルストイはここで生まれ育った。トルストイは貴族であったが領内の農民と共に農作業を行ったばかりでなく自ら樹木も植えた。地図⑦のクズミンスキーの家の東側に現在見られるマロニエの木はトルストイが植えたものと

されている¹³⁾。地図⑮は Arkovsky top と呼ばれ、この森の中には樹齢180年ほどのオークが数本ある。トルストイはここで狼の猟をした。地図⑯は、トルストイによって植えられたオークの森である⁹⁾。

2-2. 徳富蘆花が見た屋敷内の雑木林

この屋敷に1906年徳富蘆花が訪れたときの日記を「順禮紀行」として彼自身が記している¹⁴⁾。その中には徳富が「雑木林」と表現した林が2箇所と、<雑木林に類似する林>の記述が1箇所ある。1つ目は、徳富が到着した日である6月30日の午後トルストイに誘われてヴロンカ川へ水浴に行ったときに目にした林である。ヴロンカ川は図1では上方に描かれている川である。徳富の書き残したのは、この川へ向かうため「丘を上りて、此方近道也とて雑木林の緑深き中に入りぬ」というルートである。この日のルートは、トルストイが「…近所の川なれど、今同所に堰を設け居れば今日は些遠くまで出かく可し、さらば来られよ」と徳富を誘って出かけたルートである。まず林檎畑に出て、近道を取り「荊棘（いばら）の籬（かき）の崩れ」を潜って行った。2つ目は7月1日に草掻きに行ったときのもので「西裏の林檎畑をぬけ、雑木林に入る。」「雑木林の端やや開けたる所、すでに刈られたる草一面に伏し、草地の中程に白樺三四本一叢なしてたてり。」という記録である^{15) 16)}。最後は、7月3日に三回目の水浴に行ったときのものである。ヴロンカ川からの帰り道にトルストイの後をついていくと路をはなれて「疎林」を歩むことになった。「樺あり、楡あり、皆若木、蔭と光と疎らに落ちて、7月の緑、衣を染めんとす。翁の曰く、余は此林の散歩を好むと。」とある。徳富によればその疎林はトルストイが好んで散歩した林だったらしい。この林を歩きながらトルストイは徳富にロシアの小説作家談義を練り広げた。4日にも水浴に行くことになり、行きは徳富一人で前日の帰りに通った道を逆に辿った。徳富は疎林を歩きながら前日のトルストイとの話をしみじみ思い出している。7月5日の未明には徳富はヤスナヤ・ポリヤーナをあとにした。筆者らが行ったときには地点gのそばのヴロンカ川の水の流れは停滞し水面は緑色をしていた。トルストイの邸宅と川の位置は分かるが、二人が具体的に地図上でどのルートを通って水浴に行ったかは同定するには至っていない¹⁷⁾。

3. ツルゲーネフの屋敷

トルストイの屋敷を訪れた9月25日の夜に約4時間かけてバスで南隣のOryol州（Орловская область）に行き泊まった。翌日9月26日の朝ホテルからバスを3回乗り継ぎながら4時間ほどかけてMtsensk地区（Мценск）にあるツルゲーネフの屋敷に到着した。

ツルゲーネフの屋敷はスパスコエ・ルトヴィノヴォ（Спасское-Лутовиново）と呼ばれている。広さは約40ヘクタールで毎年12万人ほどの訪問者がある¹⁷⁾。屋敷はツルゲーネフの祖父の親戚、イワン・ルトヴィノフによって設けられた。それ以前には白樺林があった。彼が19世紀の初めにこの敷地に樹木を植えた。屋敷の概略平面図は図2¹⁸⁾に示したとおりである。図2の説明は表2に示した。教会のそばの道を北に進むとツルゲーネフの邸宅（地図④）に到着する。現在の邸宅は復元されたものである。元々は40以上の部屋を有する巨大な邸宅であったが、1906年に火事で焼けたあ

とは全てを復元することはしなかった。他者の手に渡ったこともありこの屋敷がたどった歴史は複雑である。家の南側の木陰の下から邸宅を臨む地点aからのものが写真9である。邸宅の正面で写真では右手前に写っている喬木はカラマツである。ほぼ同じ位置から東側を見たものが写真10である。林床には稚樹は生えておらず、平たく開けた地面が広がっている。写真11は地点cからの写真であり、地図⑩のツルゲーネフが自ら植えたオーク（oak）の木である¹⁹⁾。このオークを左手にみながら道を北進すると地点dで撮影した写真12に示されるシナノキの並木道がある²⁰⁾。この道は池（地図⑦）に向かって徐々に下がっていく小道である。図2の平面図を見ると分かるが、この道の途中で平面図の中央部分にX I Xと描いたように見える道がある。これは「19世紀」をローマ字で表現してX I Xの形になるように設計した道である。その交差路から振り返って邸宅を見ると視点eからの写真13のようになる。池のほとりで行き止まる道を東進し、突き当たる道を北進したダム（地図⑥）の手前から池を臨むと地点fの写真14の景色が見える。池の東側の小道を池に沿って北に向かって歩いていくと順次地点gの写真15、地点hの写真16の景色が出現する。白樺やオークの木が点在して見える。

4. 両文豪の関係と庭の特徴

トルストイとツルゲーネフの屋敷は、今回の行程ではバスを乗り継いで約8時間の位置にあったが、交通手段によってはもっと短い時間で往来できるであろう。二人の文豪の間には交流があった。ツルゲーネフの邸宅内の仕事部屋には当時彼が使っていたというチェスのセットが置いてある。ツルゲーネフはチェスの名手であった。二人は部屋でチェスを行ったことがある。二人の交流は1856年には始まっていて、当時パリを旅行していたとき、トルストイはツルゲーネフと一緒に各地をめぐりオペラ鑑賞などをした²¹⁾。ツルゲーネフもヤスナヤ・ポリヤーナに2回は訪問したことがあるという²²⁾。しかしあるとき子供の教育についての議論が白熱し双方の意見が対立して喧嘩になった。二人は決闘（duel）寸前のところまでいったが何とかそれは回避された²²⁾。1878年には二人は和解したことになる²¹⁾。これらの事実がなぜ重要かと言うと、国木田と徳富の間にも交流があったように、トルストイとツルゲーネフの間にも交流があったということが分かるからである。両屋敷の意匠に関しては、邸宅へといざなう道の両側に喬木が植えられて並木になっている点は共通している。並木の樹種はトルストイのプレシウスベクトは白樺で、楔形の私園はシナノキで、ツルゲーネフの小道はシナノキである。トルストイの屋敷の楔形私園とツルゲーネフの屋敷のX I Xの形の小道は形態的に類似している。二人とも自分が生まれたときにはそれぞれの屋敷はすでに存在していた。彼らは自ら地割りをして造園事業に携わるような必要はなかった。すでに屋敷は与件として存在していたので、それを母体にして生活を育てていけば良かった。邸宅近辺の落葉樹に関しては、現在ではツルゲー



写真9. 林中から北向きに邸宅を臨む，地点a
(2010年9月26日撮影)



写真10. 写真9と同じ位置から南を見る，地点b
(2010年9月26日撮影)



写真11. ツルゲーネフ植樹のオーク，地点c
(2010年9月26日撮影)



写真12. シナノキの並木道，地点d
(2010年9月26日撮影)



写真13. 並木道の交差路 X I X (19) の意匠，地点e
(2010年9月26日撮影)



写真14. ダム近辺から見る池の景色，地点f
(2010年9月26日撮影)



写真15. 池の東側の道1, 地点g
(2010年9月26日撮影)



写真16. 池の東側の道2, 地点h
(2010年9月26日撮影)

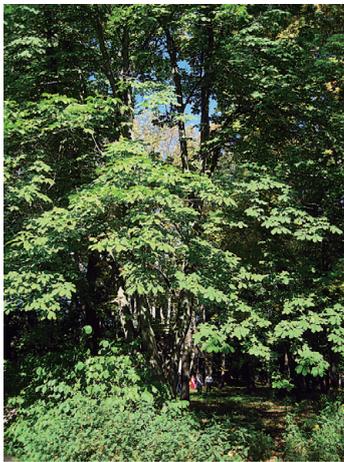


写真17. トルストイ植樹のマロニエ
(2010年9月25日撮影)

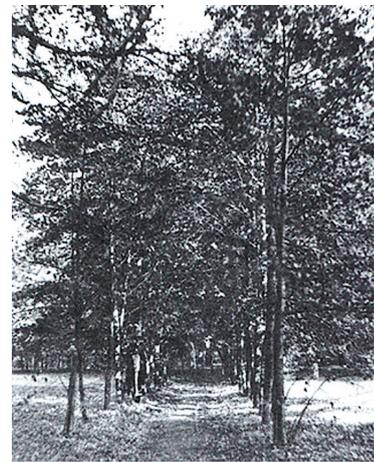


写真18. Karrik, Alley in the Park. 1883¹⁸⁾

ネフの庭の方がその林床の実生樹や雑草などの下草刈りが頻繁に行われているように見えた。文豪達が住んでいた時代にも、両者は屋敷内の管理の精度などで違いがあったに違いない。ツルゲーネフに比べるとトルストイはより、身分による差別を超越したいとか、自然を尊重したいというような考え方を持っていたように思われる。農民と一緒に畑仕事をしたり、彼らのために学校を作ったりしたことが想起される。トルストイは農民たちの質素でシンプルな生活に憧れすら感じていたふしがあり、自分の生活の中にもそのような要素を取り入れようとしていた。このような姿勢はおそらく屋敷内での無駄な労働は省くということになって現れ、屋敷内の管理も比較的大雑把な様相を呈していたのではないかと考えられる。しかも屋敷のスケールはトルストイの場合はツルゲーネフのその10倍近く面積がある。トルストイの屋敷の庭は敷地の端の方に小さな川があり、ツルゲーネフの屋敷には大きな池がある。後者は対岸に生えている樹木が池に反射して静謐な感じが広がり風景的なポキャブラリーに変化がある。ツルゲーネフの屋敷は面積が小さい分、景色の変

化をドラマチックに演出できているように感じる。概括するとツルゲーネフの庭の方が敷地面積に対して落葉樹の存在割合が多くロシアの秋の季節の訪れをコンパクトな敷地全体で感じることができると思われた²³⁾。

要 約

19世紀末から20世紀初めにかけて、従前からあった東京郊外の林に「風景」としての価値を発見し文学として著した二人の日本人の文豪がいる。国木田独歩と徳富蘆花である。国木田はツルゲーネフ、徳富はトルストイの文学から大いに示唆を受けた。これらの日本文豪の著作は、日本において雑木の庭が出現し受け入れられるようになる素地を当時の社会につくりだした。ツルゲーネフやトルストイの文学の中にはロシアの林の描写があった。本論では二人のロシア人文豪の屋敷の生活環境を調査し、彼らの屋敷内に立派な林があることを示している。2010年秋に現地でも撮影した写真を添付してその現状を明らかにしている。二人のロシア人文豪の交流、屋敷の庭の比較などを行っている。

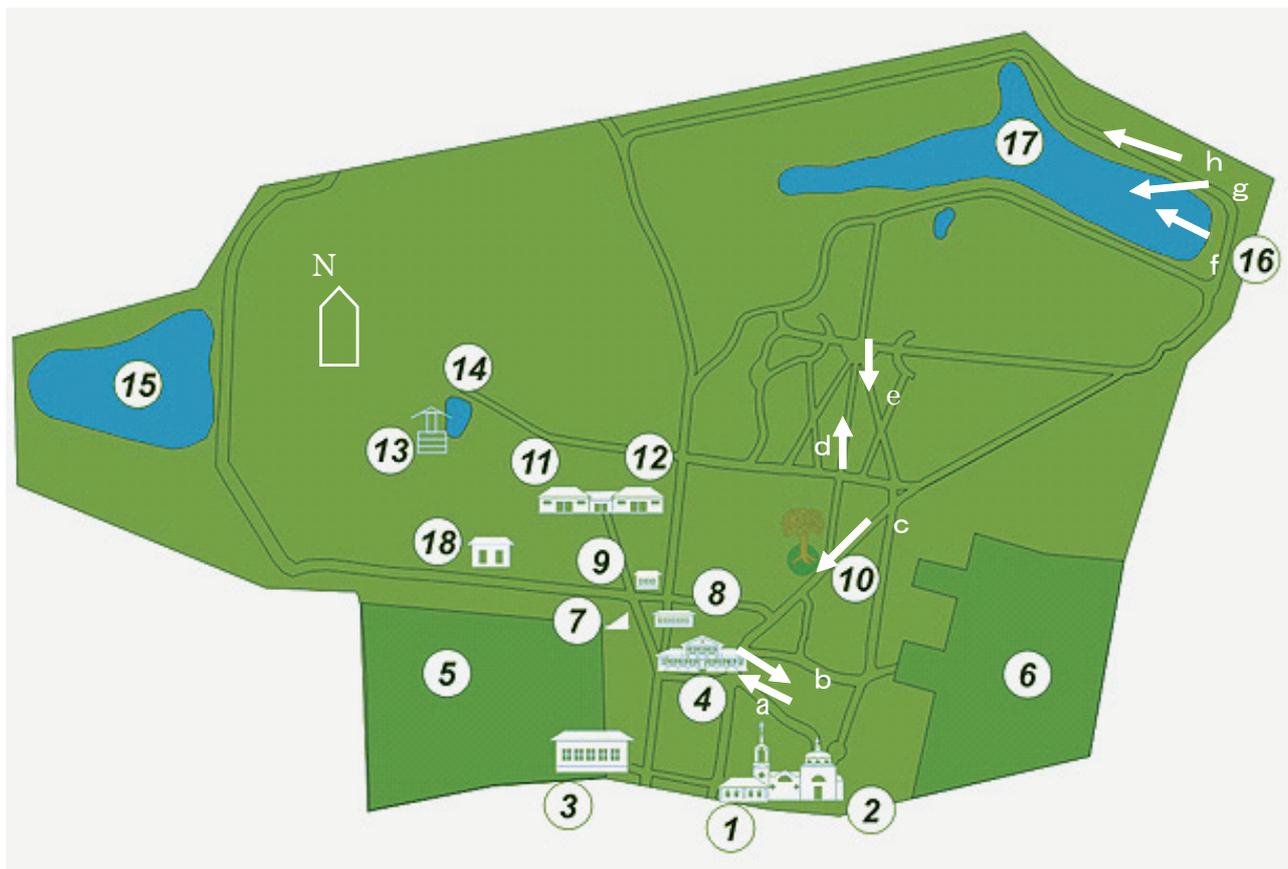


図2. ツルゲーネフの屋敷 スパスコエ・ルトヴィノヴォ¹⁷⁾

表2. 図2の地図の内容¹⁷⁾

番号	英 訳	和 訳
①	Church Lodge (Booking)	教会の門衛
②	Church	教会
③	Hospice	宿泊所
④	House-Museum	住宅—資料館
⑤	Upper Garden	上方の庭
⑥	Lower Garden	下方の庭
⑦	Cellar	地下貯蔵室
⑧	Wing	ウイング
⑨	Bath	浴室
⑩	Oak	オーク
⑪	Stable	馬小屋
⑫	Coachhouse	馬車置き場
⑬	Well	井戸
⑭	Forging a pond	池1
⑮	Zachary Pond	池2
⑯	Dam	ダム
⑰	Big Pond	大きな池
⑱	WC	トイレ

謝 辞

調査に当たって、まずモスクワ大学の Elena Petrova 氏ならびにその家族の方々にお世話になりました。また、トルストイ（屋敷）美術館の Elena Alekhina 氏より徳富が訪問した頃の屋敷内の状況について示唆を頂きました。ここに記してお礼申し上げます

補 注

- 1) 柄谷行人（2008）定本日本近代文学の起源 岩波現代文庫：p.24 柄谷は、「たとえば、国木田独歩の『武蔵野』や『忘れえぬ人』（明治31年）においてはありふれた風景が描かれている。ところが日本の小説で風景としての風景が自覚的に描かれたのは、これらの作品が始めてであった。」としている。柄谷は、風景が出現するためには知覚の様態が変わらなければならなかったと言う。また、中国の山水画には「風景」は存在しなかったと述べている。
- 2) 阿部軍治（2008）徳富蘆花とトルストイ 彩流社 p.2
- 3) 前掲書2) p.44. これらの本を読んで感銘を受けたという徳富は、物語の中のどこから学ぶべきものを見出したのだろうか。徳富はヤスナヤ・ポリヤーナでの滞在中、実際に会ったトルストイの家族の人々の中に、トルストイの小説中の様々な登場人物のモデルを発見している。それほどよく読みこんでいたのである。「戦争と平和」から徳富が学んだことに関して、阿部は、「この作品の壮大さや歴史小説としての新形式に驚きもしたが、何よりも、自然と人間の描き方や、情景と人間の交わりの描写の巧みさ等、トルストイの描出法に一番感心したことをうかがわせている。」と指摘している。前掲書2) p.51
- 4) 思想的な影響として直接的なものは、屋敷での滞在中に、徳富がトルストイから「君は農業によって生活するを得ざるや」と農業をすすめられたことがある。1908年に農家を東京都粕ヶ谷で購入した後、徳富は「美的百姓」（自称）として農業を始める。
- 5) 岡島直方（2005）雑木林が創り出した景色 郁朋社
- 6) 空港などの国際的な場所以外では全く英語が通じないという点、通常見慣れないキリル文字によるアルファベットが使われている点、などはこのような印象を生み出してもおかしくない。
- 7) ここで屋敷としているのは、エステート“estate”のことである。エステートは貴族の生活様態を端的に説明する。トルストイのエステートでは自己充足的に生活ができた。このようなエステートはロシア内に点在しそれぞれがある程度独自の政策をもって営まれるという性質が存在していた。幼少からここで育ったトルストイは、兄弟でヴロンカ川で水浴をしたり、猟を行ったりした。Patricia Chute（1991）Tolstoy at Yasnaya Polyana, Cornelia & Michael Bessie Books, p.11
- 8) 日本とロシアの造園関係の大学生に自国の「森林」のイメージについて、単語、状況説明、スケッチを描くように指示し、両者を比較した研究がある。ロシア人はキノコ狩りの経験から林の中にマッシュルームの絵を描く。キノコは彼らの林のイメージに付帯している構成要素であるらしい。平成21年度 日本造園学会全国大会 ミニフォーラム「風景評価の異文化比較～日露風景比較プロジェクト～」ハンドアウト pp.5-6
- 9) <http://www.yasnayapolyana.ru/museum/manor/index.htm>
- 10) ここだけでなく、管理主体はトルストイが生活していた当時の状況を再現しようと現在動いている。
- 11) 白樺でできたベンチはトルストイの要求に応じて造られたものであり、屋敷の中でも彼が好んで休憩をした場所であった。長い散歩をした後、ここで休み、若いモミの木の本木の静けさを楽しんだとのことである。前掲9)
- 12) トルストイの家族の言い伝えでは、ヴォルコンスキー公爵の時代に、楔形の私園（図1⑩）では彼のもとにいた少人数のオーケストラが演奏を行ったという。前掲9）。前掲書7) のP.12によればトルストイの「戦争と平和」の中には、ボルコンスキー公爵（Prince Bolkonski）がまだポーチに現れる前の朝7時に8人の音楽家がハイドンの交響曲を奏でる場面があるというが、日本語に訳出された「戦争と平和」の中にはその記述はない。その記述は「戦争と平和」の最終稿ではなく、草稿バージョンの中にあるということである。ツルゲーネフの家の広間でもペザントによる演奏会は行われていた。
- 13) 他にもリンゴ、ナシ、ラズベリー、スグリなどをトルストイは屋外に植えた（Anastasia Petrovaによる）。イタリアから取り寄せた木（林檎）は冬の寒さで枯れてしまった。地図12の温室の中では、南方の植物が栽培された。「トルストイが（植物を）植えた」とエクスカッションのガイドは述べたが、全ての作業を彼自身でやらねばならぬことはなかった。敷地にはペザント“peasant”と呼ばれる農場労働者がいた。この人々は農業だけでなく木を植えたり、靴を作ったり、大工仕事を行ったりした。トルストイが植えたとされているマロニエについては写真17参照。
- 14) 徳富蘆花（1966）徳富蘆花集 筑摩書房 pp.166-188. 同書には徳富蘆花がトルストイを訪問した翌年の1906年に出版した「順禮紀行」が収録されている。徳富が正しい鉄道の駅に降り立つのに苦労した話、朝早く着きすぎたので「池を周りにや下れる所」の樺の木の下の青塗りの狭い板の腰

掛で待ちながらしばし寝ていると、人の気配がするので瞼を開けると「おお、君はトキトミ君」と手を伸ばしたトルストイから声をかけられた出会いの話などがある。この5日間のヤスナヤ・ポリヤーナの滞在記は極めて克明に書かれている。目にしたもの、耳にしたことを文章だけの力で書き残すために払っている彼の集中力はすばらしい。トルストイの屋敷で徳富は、トルストイと議論したり、家族の人と談話したり、農作業の手伝いをしたりした。注16)にもその傾向を抜粋したが、徳富はこのロシア訪問でロシアの景色を日本の武蔵野の景色を思い出しながら見ていることが分かる。それは「順禮紀行」の中の6月26日に記された「露西亜に入るは寧（むしろ）故郷に入るの感あり」や、6月29日に記された「武蔵野を斗舛（とます）で量りばら撒きて なほあまりある大露西亞の原」の歌から分かる。（同書p.169.）最初から武蔵野の美の原点を探ろうとしているかのようである。

- 15) 7月2日にも徳富は水浴に行っている。この日は徳富一人だけでかけた。トルストイはこの日水浴に現れなかったが、帰りはアレキサンドラ嬢が馬車で川まで迎えに来てくれたという。正門から出て、ヤスナヤ・ポリヤーナの村を下りて上がる道を行った。途中道に向かってそばに立っている白樺の林に「獵者のスケッチ」（ツルゲーネフの小説の名前）を思い浮かべながら坂を上がって道に出た、と徳富は「順禮紀行」に記している。徳富はトルストイの屋敷周辺をツルゲーネフの「獵人日記」の面影を感じながら歩いていたことが分かる。
- 16) 「雑木林」という用語を、徳富はすでに1900年の著書である「自然と人生」において使っていたわけであるから、1906年の「順禮紀行」でこの言葉を使ったのは徳富にあって初出ではない。国木田が1898年に着眼した「武蔵野」という場所の特徴を、1900年に徳富は「雑木林」ということばで補強した。一つのイメージに別のイメージのレイヤーを付与することによりその持つ意味に広がりをもたせたということである。もともと、武蔵野を描写するのに用いていた言葉（「雑木林」）をさらにロシアの野で適用したというのは、元来ロシアの白樺林から始まったイメージが一巡して別の言葉となって元の場所に戻ってきたようなものである。
- 17) トルストイと徳富が初日に水浴した場所についてはトルストイミュージアムの Elena Alekhina 氏によれば図1の左上●（黒い点）で示した場所ではないかと示唆を受けた。ここにかつて水浴小屋があったからだということであった。
- 18) <http://www.spasskoye-lutovinovo.ru>
- 19) ツルゲーネフは来訪者に対して次のように述べたという。「スパスコエ（ツルゲーネフの屋敷の名前）に入るときには、まず私に、ついで家、庭、そして私の（植えた）若いオークの木にお辞儀してください。」“Когда будете в Спасском, поклонитесь от меня дому, саду, моему молодому дубу”ロシアにはかつて出会った人に対してお辞儀するという習慣があった。この伝統を革命後の現在は保持していない。モスクワで一番古い oak の木は、コロメンスコエの屋敷の中にあり樹齢400年から600年である。
- 20) このシナノキの1883年の状態を示すものが写真18である。幹が細くて現在の写真12と樹形が違う。<http://www.turgenev.org.ru/index.html,Fig99>
- 21) この記述は一燈園資料館香倉院（京都）でのトルストイ展（2010年9月11日～12月5日開催）の展示の中から抜粋した。2010年はトルストイ没後100周年ということで各地で記念事業が催された。Bunkamuraシアターコクーンではジェイ・パリーニの小説に基づきトルストイの晩年を描く「終着駅」が上映された。映画の舞台としては実際のヤスナヤポリヤーナは使われていなかった。映画はトルストイの晩年に注目しており、彼の文学者としての成功が、本人や家族のものであることを超越し、トルストイアンや一般的読者のものになってきていたことを描く。そのような時期に徳富は訪問したのだった。
- 22) Anastasia Petrova による。
- 23) 筆者は屋敷内でロシアの秋に向かう季節の変化を感じ取りたかったのでこの感想に至ったが、それぞれの林に独特の味わいがある指摘として、例えばマツ林は穏やかな静けさがあり、独特のとても良い香り（アロマ）があることで、リラックスした気持ちになるというように、林分構成によってそこから得られる感覚が異なる。